

2025年度第3回神戸市子ども・子育て会議

日時：2026年3月10日（水）15時00分～16時30分

場所：神戸市役所1号館14階大会議室

1. 開会

2. 議事

(1) 2026年度当初予算における子ども・子育て支援関連施策

●事務局

資料1により説明。(省略)

○委員

- ・5歳児健康診査について、発達障害の専門家の先生と話をする機会があった。神戸市は小児科（指定医療機関）にて実施とのことだが、こどもが小学校入学後にどれくらい学習ができるか、あるいは発達に少し遅れがあるこどもたちのチェックができるのか、自分も心配だし、専門家の先生も心配しておられる。

鳥取県立総合療育センターの院長作成の問診票であるとか、長浜市のチェックリストでは、保護者がまず記載し、その後、現在通っている園（保育園・幼稚園など）の担任の先生が記載したうえで、その問診票を持って健診に行くようになっている。神戸市では、健康や虐待についてのチェックはできると思うが、こどもが小学校に入学後、発達の遅れまでチェックできるのか。

素晴らしい制度なので、問診票やチェックリストの内容の検討、それらの小児科の先生への提供なども考えていただき、初年度は秋ぐらいからの実施だと思うが、2～3年目ぐらいからはもう少し早い時期に前倒しをしてはどうか。

- ・資料1の3ページ「産前・産後ホームヘルプサービス」について、実際の経験者の方に聞いてみると、産前の10回よりも産後の20回の方がありがたいという声が結構あった。同じ30回をするのであれば、現在の利用率を見て、産前を少し減らして産後の方を増やすということも考えられるのかと思う。
- ・15ページ「スクールソーシャルワーカーの配置」について、子育て相談など、乳幼児や3歳以上のこどもたちの相談を受ける先生たちから意見を聞いたり、私自身も日頃から感じているのが、保護者自身が発達障害や精神疾患などを抱える保護者が増えてきて、こどもの子育て相談がうまく進まないというケースもある。教育委員会のスクールソーシャルワーカーが学校などに配置されていることは素晴らしいことだと思う。今後、公立の学校園以外にも、ソーシャルワーカーのような、家庭や学校などをつなぐ方の配置がもう少し増えたら良いなと思う。これは来年度ではなく、それ以後のことの

お願いである。

- ・ 16 ページ「コミュニティ・スクールの推進」で、1 行目の「全ての学校園に設置し」を「全ての“公立の”学校園」としてほしい。「全ての学校園」とあれば、この資料を読まれる方は、私立の保育園、幼稚園、認定こども園も含まれると思う方もいると思う。

●事務局

- ・ 5 歳児健康診査について

今、関係機関と協議を進めている最中であり、問診票・受診票の案として、集団生活や生活習慣の状況を聞き取る方法がある。保護者がどう受け止めているかを確認させてもらうとともに、こどもの所属機関での様子も報告を受けられるよう進めている。その問診票・受診票の中で、現在の子育ての悩み事や就学に向けた不安について状況を把握できるよう考えている。

- ・ 小児科の先生への情報提供等については、令和 6 年度から関係機関とのヒアリングや検討会を実施しており、今後のフォロー体制や、従事者向けの手引きの作成についての議論をするところである。今後、医療機関向けの説明会や、従事者向けの研修会も実施予定なので、医師会や関係機関との調整を十分に行い、医療機関の確保と健診内容の平準化に努めていきたい。

○委員

- ・ 発達障害の先生によると、保護者は「家では困っていません」と言われるケースが大変多い一方で、こどもの所属機関では「集団生活では大変困っている」と言われる方が多いようである。保護者自身がどう受け止めているかという質問だけであれば「困ってない」という答えになりかねないので、ぜひこどもの所属機関にも聞いてもらいたい。他市では、保護者が園から問診票を取り寄せ、保護者自身が書いたものと両方を小児科に持参するケースがある。

●事務局

- ・ スクールソーシャルワーカーの配置について

現状の制度の中では、幼稚園・保育園では、主任や主幹の先生が地域や学校、福祉等とのつなぎを担っている。主任の先生がそのような仕事に専任できるよう代替職員の配置もされているが、主任がかなり忙しく、追加で配置したいということだと思われる。今のところ、国がそのような施策を出していないが、他都市の状況も見ながら検討をしていきたい。まずは主任や主幹の先生向けの研修も充実させていきたい。

●事務局

- ・ コミュニティ・スクールの推進の記載について
誤解を生まないよう修正する。

●事務局

- ・ 産前・産後ホームヘルプサービスについて

令和 6 年度から、産後の回数を 10 回から 20 回、産後 1 年までの期間設定を 2 年に延長するなど、サービスの拡充を図っている。利用者へのアンケートも実施しており、今

後どのような形で有効活用できるか検討していきたい。

○委員

・外遊びについて

9 ページに「外遊び関係人材の育成」とあり、今年度も来年度も予算を付けてもらっているが、具体的にそこに関わる人件費について考えがあるのか。

兵庫県の場合、「子どもの冒険ひろば」補助が 20 年くらい前からあるが、当初何百万という補助だったが、だんだん予算が削られ、来年度は何とか 15 万円を貰える状況である。その補助金で 10 数回以上実施するとなると、1 回で使えるお金が 1 万円あるかないかで、そこに人材を派遣しどうこうするというのがかなり難しいと思っている。そのあたり、今後どのように考えているか。

- ・教育委員会も国も、「自然体験は大事なのでしましょう」と取り組んでいると思うが、校長や教員の何人かに聞いたところ、県の自然学校の補助金は、「4 泊 5 日なら出すが 2 泊 3 日なら出さない」など、県からの補助金がカットされているようだ。県の補助は 4 泊 5 日だけのため、今まで貰えていた補助金が貰えなくなり、「ハチ高原」に行けていたものが「神戸市立自然の家」に変わっていった。そうすると神戸市中の学校が全部そこに行ってしまう、施設の予約が取れず、現場の先生は困っている。ハチ高原に行くことによって、神戸市内では体験できないことをたくさん体験できるし、それを「体験」という言葉で書いてあるのがすごく良いと思うが、実際の中身、体験・遊びをどのように考えるのか。また、運動場を使うとスポーツという名目になっているが、スポーツと遊びは違うと考えている。指導員が教えるのか、自然に遊べるのか、全然違ってくるのではないかと思うので、そこをどう考えるのか。神戸の自然があって山があって海があってという特徴を生かしてほしい。

予算が厳しくなってくると、体験させるための交通費にお金が割けず、先生たちも苦労している。バス代が上がってしまっているというのもあると思うが、その辺についてどう考えるのか。

- ・小学校給食の無償化は良いと思うが、今後もこの提供単価 (357 円/食) でいけるのか。他都市で給食を担当している栄養士から「決められた金額に食材費を収めるために食材の質が下がってきている」と、かなり苦労されているように聞いているが、神戸市は大丈夫か。

●事務局

- ・市としても、こどもの外遊びの推進が非常に重要であると考えている。スマホが普及しているなか、五感を使って危険を察知したり回避したりする能力などを身につけることが非常に大切だと考えている。

9 ページに掲載のとおり、公園では従来のボール遊び禁止等の看板を見直し、バスケットゴールを倍増するなど、環境整備を進めている。地域協働局の予算ではあるが、子どもたちが自然の中で自由に遊びができるように、外遊びの人材育成にも取り組む予定である。

- ・資料に掲載はないが、こども家庭局においても「こどもっと KOBE」という子育て応援サイトの中で、来年度は外遊びをテーマにして各区とも連携しながら、地域の取り組みの情報発信を強化していきたい。
- ・委員からご指摘いただいた兵庫県の「子どもの冒険ひろば」補助について見直され、令和8年度から公益財団法人兵庫県青少年本部の事業に移管し金額が変わると認識している。神戸市においては「地域貢献活動補助金」という補助金があり、外遊びも特別枠としてあるが最大3年間ということで、支援については今後の課題だと思っている。学校や家庭だけではなく、地域社会と行政が連携して、こどもの生きる力を育む環境を整えることが大切であり課題として認識している。伺ったご意見も踏まえ、地域協働局とこどもの外遊びについて、何ができるか連携して取り組み、検討をしていきたいと考えている。

○委員

- ・補助金が3年で切られるのは厳しいということを理解して検討してもらえるのはありがたい。これを基にいろいろ考えてもらえると神戸ならではの子育てにつながってくると思うのでぜひ頑張ってもらいたい。

●事務局

- ・自然体験について

自然の中でもこの集団活動を通じて、命に対する畏敬の念や感動する心、より良く問題を解決する力を育むなど、生きる力の育成を図るために、兵庫県の交付金を活用して自然学校を実施している。令和7年度は、全小学校においてハチ高原等での2泊3日の宿泊活動と、学校や近隣の山・河川等での2日間の日帰り体験の活動を実施してきた。令和8年度については、引き続き2泊3日の体験学習を考えている。集団宿泊活動と2日間の日帰り体験活動をしっかり学校で充実させることにより、自然学校実施の目的を果たしていきたいと考えている。

○委員

- ・とても良いことだし、やってもらえたらと思う。ただ、地元を使うことはよく分かるが、市外など違うところに行って体験することも大事ではないか。それに対し今後どのようなことができるのか、という話である。今すぐ答えを求めているものではないが、「現場の先生たちから、体験させてあげたいことはあるが、そうせざるを得なくてそうしている」などの声を聞く。やはり、新しい、行ったことのないようなところで新しい体験をすることもすごく大事なことである。

●事務局

いただいたご意見は所管課に伝える。

●事務局

給食費について、小学校は、物価高騰分の負担も含め、令和8年度より完全無償化する。引き続き、多様な食品を使い、バランスのとれた献立となるよう努める。

○委員

- ・ 8 ページ「やってみたいを支える、こどもを主体にしたまちづくり」の「(4) こどもの居場所づくり」において、米の配付の記載があるが、どうしても「こども食堂など小学生以下の皆さんに」というイメージである。中高生世代や大学生世代、ユース世代に対しても、サポートとして食材などのフォローをしてもらえるのかどうか。特に、地方から来ている大学生、神戸の大学を選んで来たが、食材高騰で食べるものを我慢し、学費を納めるために一生懸命アルバイトをする。アルバイトと学業だけでなかなか隙間がなく、体験活動を担う余力がない。大学生世代にユース活動を担ってもらうことは非常に大きな力であり、大学生自身の成長にもつながると思う。大学生も非常にお腹を減らしているなど我慢している部分を考えると、中高生世代や大学生世代、ユース世代に対してのサポートも考えてもらえるものか。

●事務局

- ・「こどもの居場所づくり」事業のメインターゲットは、小中学生くらいであり、実際に今実施されている利用者は小学生が1番多い。
団体によっては、学習支援で中学生の支援をしたり、その中に高校生も入ったりというケースはあるところ、補助金はその目的に沿う必要がある。団体の取り組みとして、ユース世代も含め多世代の交流として居場所をつくっていく、地域の方たちを巻き込んでいくことは進めていただければと思っており、そのような事例があれば紹介したいと考えている。
大学生くらいになると、利用者というより、こどもたちに学習を教えるなど、こども食堂にボランティアとして参加されるケースも多くある。食の支援で言うと、通常大人からは料金を取るが、ボランティアで参加してくれた方には無料で食事を提供しているところもある。
- ・大学生が食事に困っているという部分については、来年度、他局の事業にはなるが、学食等を通じて食の支援をすることも現在考えているところである。

○委員

- ・先ほど話題に出た自然学校について、4泊5日でハチ高原に行くべきだと考えている教員もたくさんいる一方で、こどもたちの体力やアレルギー対応、感染症対策などを考えると無理になってきているという声もあるのが実情である。
- ・令和8年度予算について、共働き子育てしやすいまちランキングで1位になったことに甘んじることなく、皆さんが切実に予算要望された結果が繋がっているのかなと思われるすごく良い内容だと思う。
- ・8ページの放課後の中学生を対象にした「地域型学習支援」について
塾に通えないこどもたちが対象かと思うが、現状を見ると、中学生ももちろん学習支援が大事だが、小学校の段階で塾に行っている子と行っていない子の差が激しくなっており、小学生に対する学習支援も大事だと思っている。無償で学習支援を行う民間団体に対して補助するのであれば、小学生を対象に、草の根的にNPO法人として活動され

ているところについても、この事業の中にうまく組み込めないかなと思っている。早い段階でこのような学習支援を行える方が、こどもたちの学びの意欲が折れないうちにしっかりと支えていけると思っているので、検討してもらえたらと思っている。

- ・10 ページの「情報発信等による子育て支援施策の推進」について、意識せず生活していても、各所で「こどもっと KOBE」の発信が増えたと思っており、サイトもすごく充実しているのが分かる。ただ、多岐にわたる子育て施策が神戸市にあるが、そこにたどり着くまでに困っている人がいるのではないかと気になっている。ホームページのデザイン的にも内容的にもすごく充実しているが、肝心なところにたどり着くまでにちょっと時間がかかる印象がある。本当に欲しいのは、今私がしたいことに対してどんなことを神戸市はしてくれるのかがダイレクトに表示されたら良いが、ちょっとスクロールして読む必要があるなどで、その文字量もすごく多いため、たどり着けるようだとどりに着けないと思っている。子育てに悩んでいる保護者が、困ったときにたどり着ける、できるだけ簡単なものにしていくのが良いと思うので、予算的には変わっていないようだが、今後の見通しなどあれば教えてほしい。
- ・現在、学校で日本語のサポートが必要な子たちがとても増えているため、就学前にサポートする仕組みはないか。外国人労働者雇用などの流れで日本語のサポートが必要な子たちが転入してきたときに、市として就学前にアプローチするような議論がされているのか教えてほしい。

●事務局

- ・情報発信については、予算資料では掲載はないものの、さまざまな変化を出しているところである。「こどもっと KOBE」のコンセプトは、市民目線での発信を強化することであり、行政発信にするとどうしても読まれないため、例えば、体験された方を主体とした読みもの記事であるとか、専門家のコラムに力を入れて取り組んできたところである。検索してもなかなかたどり着かないというご意見もいただき、そう感じるところもあるので、引き続き改善の検討をしていく。

●事務局

- ・中学生向けの学習支援を小学生にも広げようご提案について、現状、中学生向けの学習支援として「学びへつなぐ地域型学習支援」がある。この事業では、高校受験に向けてほとんどのこどもたちが塾に行っている中で、塾に行けない子のサポートについて、個々の進路に応じた受験対策に向け、かなり手厚い支援と学習指導が必要である。団体への補助もそうだが、ボランティア募集まで支援をしている。

小学生向けに地域で支えていく学習支援というのは、「こどもの居場所づくり」補助金で実施している団体が多い。これは小学生の指導なので中学生ほど専門的な内容ではないので、地域の方に支援いただいて基礎の勉強を教える取り組みを行っている。学校と連携した取り組みが広がってきており、これからどのように小学生を支えていくか教育委員会とも連携して考えていきたいと思っている。

●事務局

- ・就学前の日本語サポートの必要があることもたちが増えているが、今まで神戸市では、お子様や保護者とコミュニケーションを取るための指差し帳を6か国語で作成しているほか、通訳の派遣事業なども実施している。また、国の補助メニューとして通訳の方をスポットで雇う場合の補助金や、一定数以上の支援が必要なお子様がいる場合には、常勤スタッフも配置できるような補助メニューもある。外国人との共生のための司令塔となるセクションが内閣官房にできたので、今後、拡充施策が出てくるものと思われる。適切に対応していきたい。

○委員

- ・外国人との共生について、国は日本語の支援に力を入れ、就学前から取り組んでいるという今のご説明のとおりだが、第2言語としての日本語の学習には、並行的に母語の維持がすごく大切と言われているので、神戸市がもし他市に先駆けて外国ルーツの子どもたちの支援をするなら、母語の維持についても配慮した施策を考えてもらえると非常に先進的で良いと思う。なかなか難しいと思うが、今はそれをボランティア団体が担っている。市としてもそのことを心に留めてもらえたらと思う。

○委員

- ・「こども誰でも通園制度」「産後ケア」がオンラインで予約できるようになっているが、一時保育はできない。一時保育は個々の施設に保護者が電話し、空いているかどうかを確認している。毎回お断りするのとはとても辛く、なんとかオンライン申請ができるようになればと希望している。

●事務局

- ・現状、利用したい方が施設に電話し、ご確認いただくという状況になっている。「こども誰でも通園制度」は、2025年1月からオンライン予約できるシステムを国が作ったので、一時保育も予約できるよう国に働きかけをしていたところ、こども誰でも通園制度を10時間超えて予約する場合は、一時保育であっても使えるようになったことは一歩前進と思っている。しかし、こども誰でも通園制度は対象が2歳までのため、3歳以上で一時保育を利用される方については引き続き電話していただく必要がある。他都市の状況なども確認しながら検討していきたい。

(2)「神戸っ子すこやかプラン 2029」の進捗に関するアンケート

●事務局

資料2により説明。(省略)

○委員

- ・アンケートの時にいつも質問しているが、このアンケートは日本国籍以外の方にも意見を求められるのかどうか。そのような方たちがどのように思って、何か不安や困難を感じたり困ったことがあるかどうかも設問にしてもらえるとありがたい。

●事務局

- ・外国籍の方にも回答いただくので、できるだけ分かりやすくと考えているが、今回は紙ではなくスマホで回答する方式とするため、スマホの読み上げ機能の使用を意識した、分かりやすくやさしい日本語の記載に努め、作成に取り組みたい。

○委員

- ・具体的な案があれば教えてもらいたい。

●事務局

- ・外国人の方が増えており、当然自身の国と言葉も文化も違う中で、さまざまなお声を聞くのが大事だと思う。今回のアンケートでは多言語の対応はしていないが、なるべく分かりやすい日本語を使用する工夫を図っている。

外国の方に話を伺おうと思うと、子育ての関係のことだけではなく、日本あるいは神戸での生活全般についての考えや悩み、そのようなことも合わせて伺っていく必要があると考えている。

例えば昨年、地域協働局でランダムに選んだ1万人の方に対して日本で生活することに関してのアンケートをとっている。日本語、英語、中国語、ベトナム語など、出身国はさまざまな国にわたるため、どうしても全て広く捕捉するのは難しいところがあるが、こういった方法も使い、なるべく広く伺わないといけないと考えている。

○委員

- ・「昨年アンケート結果」をURLで案内しているが、入力が煩雑なので、例えばQRコードに変えることは可能か。

●事務局

- ・会議資料として紙でお配りしているが、実施にあたってはウェブ回答となるので、クリックやスマホの画面タップでリンク先に飛ぶようにする予定である。

○委員

- ・子ども向けアンケートはまだたたき台だと思うが、例えばだが、4年生以上で「おうち」とはあまり言わないのではないか。また、ルビを打つのかひらがな表記にするのか。ひらがなばかりだと分かりにくいこともあるかと思うので、4年生以上の子が既に習っ

た漢字であれば使えば良いと思うが、このあたりは統一されていくのか。

- ・「あんしんできる場所」「行きたいと思える場所」の設問で、「小学校・中学校」から始まっているが、こどもにとって身近なものから順番に並ぶ方が良いと思う。例えば「公園」や「図書館」、「習いごと」など、現状は「その他」の例示となっている項目の方がこどもにとっては身近である。

○委員

- ・ウェブになるということなので、先ほどの多言語の話も、端末やアプリが翻訳してくれる。外国籍の方も、少なくとも保護者は回答がすごくしやすくなると思う。非常に良いと思った。
- ・こども向けアンケートの「⑦神戸市内で『たのしい』『わくわくする』あそび場やイベント等がふえてきたと思いますか？」の設問について、あえて「増えてきたこと」を聞きたいのか。こどもにとって「増えてきたかどうか」はなかなか難しい質問だと思うので、「たくさんあると感じているか」を聞くだけで良いのであれば、聞き方を工夫した方が良い。「神戸市内」というのも、こどもにはちょっと難しいかもしれない。
- ・「⑧あなたにとって、旅行や自然体験、習いごとなどの、楽しめる体験や、やってみたい体験ができていますか？」について、「旅行や自然体験、習いごと」を設問で書いてしまうと、それだけをイメージしてしまうので注意が必要だと思う。

○委員

- ・4年生以上の子であれば、現実はずっとスマホに向かってゲームをしたり、1番楽しい体験はスマホに向かってるときかもしれない。そういったことの炙り出しのための設問や選択肢があっても良いと思う。

○委員

- ・こども向けアンケートでは、具体的に回答例を出してしまうと、回答がそれに流れてしまうこともあると思うので、その辺はちょっとゆるやかにしたほうが良いと思う。
- ・「④あなたは大人に直接自分の意見を届けたいと思いますか？」の設問について、「届けたい」という言葉はこどもには少し難しいので、「意見を伝える」の方が良いかと思う。

○委員

- ・「地域交流センター」が全体を通じて出てこない。地域交流センターでも地域の子育て支援をやっているのになぜ出てこないのか。私のセンターでは土曜日にこどもたちに開放しており、「もっと来て遊んでね」と伝えている。こどもが行きたいと思える場所の選択肢など、「地域交流センター」を出してほしい。

第3回 神戸市子ども・子育て会議 委員追加意見要旨

○ 5歳児健診について

現在の実施方法では、仕事等で受診機会を逃してしまう家庭や、「特に問題がなさそうなので受けなくてもよい」と判断してしまう家庭も出てくるのではないかと。例えば、かかりつけ医の受診のついでに5歳児健診を受けられるような仕組みがあると、保護者の負担も少なく受診率の向上につながるのではないかと。また、そのような仕組みを導入する場合には、かかりつけ医への周知も併せて行うことで、より活用されやすくなるのではないかと。

○ 妊婦への予算について

検診回数だけでなくタクシーチケットも増やしていただけないだろうか。地域差はあるだろうが、タクシーチケットの枚数が不足するケースもあるのではないかと。私自身、以前住んでいた自宅の前が急坂で、悪阻の時期から移動が難しく、妊娠初期の段階でチケットをほぼ使い切ってしまった。体調の個人差や地域の地理的条件もあるため、もう少し柔軟に利用できる仕組みや枚数の検討があると助かる方も多いのではないかと。

○ 資料3 ページ「産後ケア事業」について

宿泊型・通所型の産後ケアについて、多胎児家庭の利用回数を増やしていただけると良いのではないかと。会議でも「ひょうご多胎ネット」の方から同様の意見があったが、私自身も双子の出産を経験し、現在の回数では十分ではないと感じた。多胎児家庭は育児負担が非常に大きいため、回数の拡充を検討いただけるとありがたい。

○ 資料5 ページ「妊娠期から出産・子育て期まで一貫した伴走型相談支援・経済的支援」について

伴走型支援について、私自身の経験だが、母子手帳交付時に不安を相談したところ、担当保健師の方がついてくださり、定期的に電話で様子を確認して下さったり、里帰り先の保健師へ情報提供をしてくださるなど、大変心強い支援をいただいた。産後もしばらく電話で気にかけていただき、非常に安心感があった。このような支援は妊婦の安心感につながる重要な取り組みだと感じている。可能であれば、希望の有無に関わらず、すべての妊婦に担当保健師がつく仕組みがあると、より安心して妊娠・出産を迎えられるのではないかと。

○ 資料13 ページ「フリースクール等民間施設を利用する児童生徒の保護者を対象とした利用料補助」について 最近、フリースクールをうたう民間施設を新たに開設するケースが増えていると感じている。補助対象となる施設の基準がどのように設定されているのか、保護者にも分かりやすく示していただけると安心して利用できるのではないかと。知らずに通い始めた後で補助対象外と分かるケースも出てくる可能性があるため、施設基準の整備や周知の徹底が重要ではないかと。

○ 資料 13 ページ「自校通級指導教室の整備」について

教室数の拡充だけでなく、担当教員の専門性や人員配置の整備も重要ではないか。保護者の方から、
・担当教員が短期間で異動してしまい、こどもや保護者が混乱する
・専門知識や対応力に差がある
といった声を聞くことがある。教室整備とあわせて、教員研修や人員体制の充実についても検討いただけると良いのではないか。

○こども評価アンケートの設問について

「あなたにとって、旅行や自然体験、習いごとなどの楽しめる体験や、やってみたい体験ができていますか？」という質問について、習い事をしていても「やらされている」「本当は好きではない」と感じている場合、どの選択肢を選べばよいのか迷うこどももいるのではないかと思った。理由欄や補足などでそのようなケースも拾える設問設計にすると、より実態に近い回答が得られるのではないか。

○ 1、ライフステージに応じた切れ目のない支援

・【2】教育・保育の提供体制

(1) 保育人材確保・定着支援について

様々な一時金給付や処遇改善が通常給料に上乗せされて支給されることで給料額面は上がり嬉しさもあるだろう。ですが基本給についてだが、人事院勧告に基づくベースアップは民間企業並みに毎年上がっているのだろうか。基本給アップがなければ、一時金支給時期以外は給与額面が下がってしまうことになるように思う。通常から給与が高くなるようになれば保育士が辞めなくなるのではないか。

(5) 病児保育事業について

全区に開設できて大変良かった。クリニック院長がこどもと保護者のためと決意を持って開設、持続されていることは素晴らしいことである。しかし、保育士配置は1対3だが、現実的に年齢や疾患名、病状によっては1対3の保育は全く出来ないケースが多々ある。感染性疾患と上気道炎などの疾患では、同室出来ないために部屋割りしたら、1対1の保育にならざるを得ない日もある。国の指針とはいえ、現実的には難しい。その現状を知って欲しい。神戸市委託事業であるが無認可施設のため、(1)の保育士確保策の対象外になっているのではないかと思われる。保育士は保育とさらには疾患等の看護の正しい知識と研修を重ね日々実践し奮闘している。病児保育に勤務している保育士にも現在処遇改善加算が支給されているが、さらに手厚い処遇改善や認可施設同様に配慮があればと思う。

○ 資料 P6 (8)「児童養護施設等退所者への支援」について

これまで、「施設」が退所者を支援してきたが「神戸市」が具体的な支援をしてくれるということに大きな意味がある。できればではあるが、単年度ではなく、継続的に実施できるよう検討いただきたい。

○資料 P7 (4)「自立援助ホームの開設支援」について

現在、神戸市での自立援助ホームは「子供の家」が運営されており、児童養護施設等では、児童自立生活援助事業Ⅱ型、里親等では児童自立生活援助事業Ⅲ型等も制度上はできるようになっている。そんな中で、神戸市として自立援助ホームをもうひとつ増やすことが必要と判断されたという認識で合っているだろうか。具体的に増えることになりそうであれば、立地的な部分で、神戸市の真ん中あたり、もしくは東側の方が利用しやすくバランスもよいため、そのあたりも検討いただきたい。

○ 予算、施策を拝見し、仕事を子育ての両立をしていくにあたり、保育所、病児保育、学童保育関連の整備を進めていただいていることに感謝する。一定の数の確保だけでなく、夏休みの学童利用のようなニーズを捉えた施策が、さらに神戸の魅力を高めていくものと思う。また、こどもたちを支えてくださる保育士などの処遇改善が進み、質のよい保育につながることを期待している。企業の立場として、子育てをしながら安心して働ける街というのは、人財確保の観点からも非常に有効であり、今後もぜひ継続して取り組みをお願いしたい。

○ 来年度予算における施策について、p9 に文化スポーツ局担当の事業があげられているが、子ども・子育て支援関連ということなら「こども本の森神戸」の絵本図書館についても挙げられたら良いのではないかと。あのように素晴らしい図書館は神戸の（こども達の）宝でもあるので、ぜひ含められると市民の皆様にも国や報道機関へのアピールになるのではないかと。こべっこランド予算も挙げられていないのも気になった。

○ 神戸市北区と西区に住む母子の悲しい事件が相次いで起こった。この母子は事件を起こすまでに悩み、苦しんだと思うが、そんな時、誰かに相談したり、「助けてほしい」と声を出したりしたのだろうか。事件に至るまでの詳細はわからないが「住みやすい街神戸」「子育てしやすい街神戸」の標語はこの母親たちにはどのように映っていたのか。神戸市では子育てをサポートする様々な施策があり、どこかにコンタクトをすれば何らかの相談や支援に結び付くと思われるが、なぜ子育て情報が届かなかったのか。届いていたとしたら、どうして救えなかったのか。どれだけきめ細かいていねいな政策を立案しても行政だけでサポートすることはできない。民間の活動や企業の努力、市民の理解や共感など、困難な課題を

抱える人たちの良き隣人としての日頃の関わりや「困っている」という声の出しやすい地域
づくりが必要ではないか。